

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	西尾 敦史
最終学歴	学 位	専門分野
筑波大学第二学群比較文化学類	文学士（比較文化学）	地域福祉、地域防災

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

人間健康学部の学びの横断的・包括的学習体系を「人間健康学」として構築し、そのなかで「健康」の価値を高めていくことができるよう、「身体」「精神」「社会」の各視点からの健康増進についての科学的知見を結集する。

【目標】

地域防災コースの意義を理解し、地域社会と協働した学びのカリキュラムを体系的に構築する。担当する科目をとおして、学生が人間健康に関する理論と実践力を身に付けることができるような、「オンリーワン」の学びの場をつくる。

【方針】

人間健康学部の学びの体系を構築し、その中で特に地域福祉・地域防災の視点からの健康増進についての教育内容を整理し、カリキュラムとして構築する。

【計画（方法）】

地域防災コースの体系的・段階的な学びのカリキュラムを、日本防災士機構と協働で検討し、「防災士資格」が取得できる学習コースを整備し、その主な内容を担当できるよう取り組む（昨年度はコロナ禍の影響もあり、機構が求める基準の受講がなかったため、今年度の計画とする）。

学生の主体的な学習意欲を喚起するために、実践的かつ双方向的な手法を用いて、学生の能動的な学習を促せるようなアクティブラーニング教育を実践する。また、ゼミ（演習）の学生に対しては、学生の状況を的確に把握し、「オンリーワンを、一人に、ひとつ」確かなものを身に付けられるように、個々の学生に対応した個別的な指導を行う。卒業論文の作成に向けた研究・学びの支援にも取り組む。また、自身のクレド「学びの「ハッピーアワー」をつくる」を実現できるよう学びの場の効果的な創造に取り組み、信頼できる人格の育成を行う。

【担当科目】

（前期）

関係行政論、基礎演習Ⅰ、災害と健康、児童家庭福祉論、社会保障論、人間健康学、地域防災論

（後期）

基礎演習Ⅱ、健康実践演習、公的扶助論、文化人類学、保健福祉行政論

○教育方法の実践

コロナ禍のオンライン授業の経験の中から、対面授業においてもLMS（Microsoft Teams）を活用しながら、Teams による授業内課題を出し、学生からの回答・反応をその場で視覚的にスクリーンに映しながら、課題について双方向的・対話的に考察し、コメントする方法を取り入れ、学生の積極的な学習態度につなげることができた。

○作成した教科書・教材

学部教員との協働により、23 年度からの学部基礎科目「人間健康学」のテキスト『人間健康学』（唯学書房、2200 円）の編集・発刊を行うことができた。

社会福祉関係の教科書として、以下のソーシャルワーク演習のテキストの一部執筆を行った。

◆ 福祉臨床シリーズ編集委員会（編集），柳澤 孝主（編集），上原 正希（編集），増田 康弘（編集）（2024）『ソーシャルワーク演習（社福専門）（新・社会福祉士シリーズ 21）』弘文堂、西尾敦史「第 4 章、2. グループワーク、3. コミュニティワーク」部分執筆 pp. 83-95.

◆ 福祉臨床シリーズ編集委員会（編集），柳澤 孝主（編集），上原 正希（編集），増田 康弘（編集）（2024）『ソーシャルワーク演習（共通）（新・社会福祉士シリーズ 20）』弘文堂、西尾敦史「第 5 章グループダイナミクスの活用」部分執筆 pp. 145-160.

○自己評価

おおむね、目標に向けた教育実践を行うことができた。

II 研究活動

○研究課題

地域福祉、地域防災、災害歴史思想、地域共生社会などに関する理論研究、実践研究をすすめる。

○目標・計画

【目標】

地域福祉、地域防災、災害歴史思想、地域共生社会などに関する研究の領域に、地域防災を加え、コミュニティ・エンパワメント、コミュニティ・デザインなどの手法を取り入れ、研究の領域を広げる。

【計画】

新たな研究領域の開拓については、競争的研究資金を獲得し、地域社会や行政、機関とも連携して、協働研究を推進する。研究の成果については、関連学会での口頭発表、また論文等の形で発表を行う。

研究上の概念として、生涯学習においてその機能が注目されている「正統的周辺参加」学習理論を基本に、地域福祉・地域防災の実践研究に応用を試みていく。また、災害に関する歴史研究、災害遺構、災害の記憶の継承というテーマを地域防災の研究に加えていく。さらに、感染症パンデミックを世界を覆う災害ととらえ、リスクに対処する社会の対応について、社会科学の視点から研究を行う。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究実績（特許等含む）

（著書）

・福祉臨床シリーズ編集委員会（編集），柳澤 孝主（編集），上原 正希（編集），増田 康弘（編集）（2024）『ソーシャルワーク演習（社福専門）（新・社会福祉士シリーズ 21）』弘文堂、西尾敦史「第 4 章、2. グループワーク、3. コミュニティワーク」部分執筆 pp. 83-95.（再掲）

・福祉臨床シリーズ編集委員会（編集），柳澤 孝主（編集），上原 正希（編集），増田 康弘（編集）（2024）『ソーシャルワーク演習（共通）（新・社会福祉士シリーズ 20）』弘文堂、西尾敦史「第 5 章グループダイナミクスの活用」部分執筆 pp. 145-160.（再掲）

・『人間健康学』単行本（ソフトカバー） 2023 年 2 月 西尾敦史（著），大勝志津穂（著），尚爾華（著），ほか（著）唯学書房

・『横浜発 助けあいの心がつむぐまちづくり 地域福祉を拓いてきた 5 人の女性の物語』（横浜市

社会福祉協議会企画監修、西尾敦史著、2017 年 10 月、ミネルヴァ書房

(学術論文)

- ・「民生委員・児童委員が活躍できる体制づくり」連合総研月刊 DI0372 号 (2022 年 1 月 1 日発行)
「地域を守る「つながり」の力」, 19-23, 2022 <https://www.rengo-soken.or.jp/dio/dio372-4.pdf>
- ・「喚起される集合的記憶 一国内の自然災害遺構の現状とその機能をめぐって」, 東邦学誌, 50(1), 15-37 (2021-07-27) <https://ci.nii.ac.jp/naid/120007163749>
- ・「「貧と病」ノート ～ 柳田国男『明治大正史・世相篇』第 1 2 章を読む～」, 福祉図書文献研究 第 20 号 2021 年 11 月, 75-80
- ・おじいさん、おばあさんと呼ぶ理由—少子高齢社会における親族呼称の擬似的用法試論—少子高齢社会のヒューマンサービス (地域創造研究叢書〈No. 35〉) [全集叢書]愛知東邦大学地域創造研究所 (編)2022-12-20
- ・「ポラーノの広場」にみるサスペンス、東邦学誌, 51(1), 35-51 (2022-06-30)
- ・研究ノート「青ヶ島還住記」ノート～柳田国男に学ぶ復興論～, 東邦学誌, 49(1), 29-40 (2020-06-30)
- ・Legitimate Peripheral Participation (LPP) in Community-based Child-rearing Support Centers (CCSCs): Case studies focusing on developing LPP process through multiple interactions among parents in CCSCs, Japan IAFOR Journal of Education Volume 8 - Issue 3 Winter 2020.
- ・花の名～高齢者福祉施設の名づけ研究、福祉文化研究 VOL. 25、121-138、2016. PDF ファイル
- ・小規模ケアのジェネオロジー～日本における小規模ケアの生成と制度化をめぐって、静岡福祉大学紀要第 12 号、51-68、2016.

(学会発表)

- ・日本地域福祉学会 (日本福祉大学主管オンライン開催) 2021 年 6 月 12 日 (土) ～13 日 (日)
口頭発表「自然災害遺構の現状とその願いと価値—発見・創設から維持・管理へのプロセス、主体、機能に着目して—」(共同研究・筆頭)
- ・日本地域福祉学会・第 36 回福岡大会 2022 年 6 月 11 日 (土) ～12 日 (日)
口頭発表「パパママたちのソーシャル・アクション— 保育・子育て「社会化」運動を対象としたコミュニティ介入モデルによる比較研究—」(共同研究・筆頭)
- ・日本地域福祉学会・第 37 回長野大会 2023 年 6 月 10 日 (土) ～11 日 (日)
ポスター発表「地域福祉を駆動 (ドライブ) させる「贈与」—コロナ禍の贈与行動の変化に着目して—」(共同研究・筆頭)

(特許) なし

(その他) なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

○所属学会

地域福祉学会、社会福祉学会、福祉教育・ボランティア学習学会、福祉図書文献学会、福祉社会学会

○自己評価

23 年度の研究上は、学会ポスター発表 1 件であったが、研究交流などの機会を得て、研究領域の裾野や視野を広げることができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

人間健康学部のポリシーの実現に向けて、その教育方針に沿った形での貢献ができるようにする。2023 年度からの学部の新たなカリキュラムをスタートさせるが、その準備のための学部の教育、学生支援、研究、社会活動の調整を行う。

【計画】

学部運営の役割・職務についてその職責が果たせるように取り組む。
教育に関しては、新カリキュラムの科目の教育内容、科目担当者の配置、調整を行い、目標としている教育目標が達成させるように努める。学生支援については、学部の中退防止の取り組みを推進し、また履修が順調でない学生の支援体制を構築する。

○学内委員等

自己点検・評価委員会、人事委員会、教養教育センター運営委員会

○自己評価

学部運営および委員会運営業務においては、おおむね目標・計画にもとづいたマネジメント・遂行を行った。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

名古屋、愛知の地域社会との連携・協働を深められるように、ネットワークをつくる。

【計画】

地域福祉、地域防災の領域で協働による研究・実践ができるように、地域福祉学会などとも協力をを行い、研究活動に参加する。

ゼミ（演習）を通して地域貢献ができるよう、地域からの提案協働型活動に参加する。とくにポストコロナにおける平和公園をフィールドとして協働活動展開、SDGs の実践を地域に根ざして展開できるように取り組む。

○学会活動等

福祉図書館学会の役員として、学会大会の開催の運営協力を行った。

○地域連携・社会貢献等

中京地区、東海地区、関東地区における人間健康、地域防災、地域福祉に関する社会貢献を行った。

○自己評価

おおむね、目標・計画にそった地域連携実践を行うことができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

大学における新たな学びの方法についての研鑽を積む。教育・研究・社会的活動の経験を新しい学びと生活様式（スタイル）の中で知の発見や刺戟に活かせるように取り組む。

VI 総括

教育活動、研究活動、学務、地域連携等について、おおむね目標・計画にそった働きができたのではないかと考えている。

以 上